

## 英語運用能力向上のために —産学共同研究の結果から—

宇田 和子\*

キーワード：英語運用、産学共同、4ステップ、英語書写

### はじめに

宇田は、平成19年学年度の1年間、さいたま市大宮区に主教室を置く、1つの英会話スクール(English conversation school, 以下Ecsと略記)と共同研究を実施した。研究の目的はEcsが実施している英語指導法を埼玉大学における宇田の授業活動に取り入れて、効果的な英語運用能力向上の方法を探ることであった。1年間の授業データ、Ecsが提示する資料と派遣する人材、授業レポートをとおして得られた結論は、1. Ecsが提唱する学習法が英語運用能力向上に有益であること、2. 授業・英語を書くこと・学習意欲・背景社会が英語能力に影響していること、3. 産学共同は多面的な効果を生み出すことであった。

### I 研究の枠組み

#### I-1 時間の枠組み

学年前期を予備調査期とした。Ecsで用いている教材と指導法を宇田が担当する授業に導入し、おおむねの調査データを得た。得られた前期データをもとに、後期にどのような授業活動を行うか、どのような方法で能力変化を測定するかの計画を作成した。

後期を実測期とした。前期予備調査をもとに

作成した計画を実行し、観察データ、計測データ、授業レポートデータを得た。

#### I-2 内容の枠組み

##### I-2-1 (1) 研究対象クラス

前期においては、「英語圏文化論演習A(教育学部英語専修3年以上)」を対象とし、受講学生は11名であった。後期においては同じく「英語圏文化論演習」であるが、Bとなり、受講生は前期からの継続8名、新規2名、計10名であった。この授業科目を研究対象クラスと設定した理由は、受講者が少なくEcsでのレッスン環境に近いこと、Ecsで使用しているテキストの一つが、科目のテーマ・受講者のレベルと合致することである。

##### I-2-1 (2) 授業への導入内容

Ecsにおける英語指導法のうち、埼玉大学へ導入した事項は3点となる。テキスト、学習方法、講師の3点である。テキストは、Ecsにおいて中級以上以上のレベルに分類された学習者向けの『CNN インサイド・アメリカ』を使用した。米国CNNテレビで放送されたニュースから、米国社会に関する15のトピックを選定し、英文スクリプト、日本語訳、音声CDを組み合わせ一冊としたもので、語学教材を多く扱う日本の出版社から、2005年初版発売されたテキストである。学習方法は、Ecsで

\* 埼玉大学教育学部英語教育講座

提唱する「4ステップ学習法」を導入した。4ステップとは、1) 英文の意味を把握する、2) 毎日CDを聞く、3) 毎日テキストを音読する、4) 週一回のレッスンで自己学習を演習発展させる、という4段階である。講師に関しては、後期において、Ecsネイティブ・スピーカー講師による派遣レッスンを3回実施した。1回目と3回目は同一講師であったので、2名の講師が訪問レッスンをした。

## II 研究の状況

### II-1- (1) 前期予備調査状況

授業2回を用いテキストの1トピックを終了するというペースで学期を進めた。Ecsの学習ステップを踏むため11名の受講者に対して、まずテキスト内容を理解すること、毎日1回はCDを聞くこと、毎日1回はテキストを音読すること、授業に来る時はテキストの内容は可能な限り理解されており、授業は学習を深めるための演習の場となるよう告げた。

毎回の授業構成は、小テスト、CDを聞く、テキスト英文を1人1文ずつ音読する、テキストの英語と内容に関する発展演習をする、次の確認をする、であった。宇田による使用言語は日：英が、ほぼ半々の割合であった。

小テストは出席を取ることを兼ねて、授業開始時に実施した。前回授業のテキスト範囲にあり、英語表現や英語文化において重要と思われる箇所の英文を3～5文、暗記しておいてテキストどおりに書くというのが、最も普通の形式であった。採点は満点を10点とし、スペリング・ミス、単語の誤り、語順の誤り、句読点の誤りなど、テキスト本文からのズレは、誤りの大小にかかわらずマイナス1点とする減点方式で採点した。CDを聞くことに関しては、すべての受講者が熱心に聞き入った。受講生が、辞書で記されている発音とCD上の発音が異なっている箇所を指摘する場面も多々あった。テキスト音読において、しかるべく音読できない学生は皆無であった。テキストに日本語訳が付記され

ていることもあり、英文が理解されていない学生も皆無であった。Ecsで提唱する4ステップのうち、3ステップまでを当然のこととして終了している状況である。従って授業で力を入れる箇所は、総合的演習のステップであった。テキストを英語で要約する、テキスト・トピックに関係する知識を英語で発表する、テキスト・トピックについて英語で討論する等を行った。しかしこの総合演習のステップで、テキストの英文から離れて自分自身で英語を話すということになると、受講者の中には発言の困難さや気おくれが見られた。背景資料を準備してゆき、それらを用いつつ、情報を補い、発話を促し、英語で自己表現する援助をすることが、毎回の授業で最も力を入れた事柄であった。授業終結は、次回授業内容の確認と、小テスト内容の選定であった。

### II-1- (2) 前期結果

前期において、テキストの6トピックを終了した。前期試験として、100単語程度の英語論説文章を4題書く、という形式を取った。論説テーマは、問1「テキスト・トピックNo.5：アメリカにおける失業、を要約せよ」、問2「テキスト・トピックNo.6：言語処理能力不全症、を要約せよ」、問3「アメリカ社会を自由に論ぜよ」、問4「アメリカの文化を自由に論ぜよ」であった。受験者11名すべて、50分の解答時間で全題に対し解答記述をした。長さにおいて200単語近い論説文が8割を占めた。テキスト内容、およびアメリカの社会や文化に関する理解や考察が不十分なものはまれで、採点時のポイントは英語の用法と表現に置かれた。綴りや文法や語法の誤りのチェック、語彙の豊かさである。スペリング・ミスはまれであった。文法的誤りの多くは、単数・複数、定冠詞の要・不要、時制の不適であった。語彙に関しては、基本的な単語とテキスト本文を暗記していることからくる単語が巧みに織り合わされ、整った解答文書が作成されていた。しかし学術的論説文を書くための論説調の単語においては、自分自身の持ち単

表1 前期状況表

| 受講生番号 | 小テスト平均点 | 筆記試験得点 | 流暢さ | 欠席回数 | 備考        |
|-------|---------|--------|-----|------|-----------|
| 1     | 9.8     | 95     | 優   | 3    | フランスへ私費留学 |
| 2     | 9.7     | 95     | 可   | 5    |           |
| 3     | 9.6     | 90     | 良   | 3    |           |
| 4     | 10      | 100    | 優   | 2    | 米へ交換留学    |
| 5     | 9.9     | 100    | 優   | 2    |           |
| 6     | 9.9     | 100    | 優   | 2    |           |
| 7     | 9.3     | 100    | 優   | 2    |           |
| 8     | 9.8     | 90     | 優   | 4    |           |
| 9     | 9.4     | 40     | 良   | 4    |           |
| 10    | 10      | 75     | 可   | 5    |           |
| 11    | 10      | 100    | 優   | 2    | 米へ交換留学    |

語となっているものは少ないことが読み取れた。

前期における小テスト平均点、筆記試験得点、通常授業における英語の流暢さ（テキスト音読や自由発話時の音声の流れと発音の正確さ）、そして授業欠席回数を一覧表にすると表1のようになる。欠席回数の中には、教育実習のためのやむを得ないものも含まれている。

### II-1-(3) 前期結果に関する考察

毎回の授業冒頭に行う小テストは、前回授業終了時においてテスト内容が確認されている。暗記しておけば書くことができる形式が多い。時には、異なった能力開発のためと異なった角度からテキストを復習するため、当日の授業でタスクを指定して書くということもしたが、自宅で復習をして記憶しておけば書けるものである。従って小テスト結果は、すべての受講者がほぼ毎回10点満点であった。受講生の勤勉さと高い記憶能力を示すと理解される。

しかし筆記試験となると、40点から100点までの得点差が発生した。筆記試験設問予告に従って試験準備をしたかの影響は大きい。しかし、テキストの理解、解答を助ける広範な知識、基盤として習得ズミの英語力も影響したはずである。得点差の理由は考察されなければならない。

英語を話す流暢さにも差が見られた。本授業科目の受講生において、単語の発音が間違っ

ている場合はまれである。抑揚の適切さも問題ない。しかし単語間のリエゾンが行われるかとなると差が見られ、さらに自分の意見を自由に述べる際、発話がなめらかに流れるかとなると、さらに大きな差が見られた。リエゾンや音を流れさせる技術は、教えられて意図的に音韻を連続させたり変化させる場合もあるが、英語を多く話していると自然に習得してしまうので、どのくらい多く英語を発話しているかの指標となる。

さて、受講生の中でバラつきのある試験得点と流暢さの2項目で、これら2つは「書くこと」と「話すこと」に分かれているのだから、実は2項目間で連関が見て取れる。すなわち「試験で満点を取った学生はすべて、英語を話す流暢さが優」である。受講生番号で言えば4、5、6、7、11の5名となる。それに対し、試験得点の低い2名、受講生番号9および10は、話す流暢さも劣っている。テキスト理解や背景知識をもとにした英語論説文記述力と、普段の英語発話のなめらかさに相関があるのである。英語能力は一般に、書く・読む・話す・聞くの4技能に分類されるが、書く・話すは切り離されて機能しているのでなく、関係し補助しあう関係にあると推定される。現在、日本において、英会話力を伸ばしたいと望む人は多いが、「会話力を望む場合でも、英語を書く力を軽視してはならな

い」と考えられる。

では次は、筆記試験得点と流暢さにおける差の理由を考察する。前期状況表を検討していると、受講者を2グループに分類できることが見えてくる。95点以上得点し流暢さ優、という組み合わせを持つグループ（受講者番号1、4、5、6、7、11）と、95点に達しないか流暢さ優ではないというグループ（受講者番号2、3、8、9、10）の2つである。95点とはほぼ満点であるから、前者グループを満点でかつ流暢と読み替え、後者グループを満点でなかったり流暢さを欠いたりしているグループと読み替えてもよい。そして2つのグループの能力差の理由は、状況表上に提示されている。欠席回数である。前者の高能力グループは欠席回数が2回か3回であるのに対し、後者のグループは欠席回数が3回、4回、5回と多い。欠席回数が多いほど、得点が低い・流暢さが低いという傾向も見て取れる。表上の欠席は、受講生が教育学部生で教育実習に行くため、やむを得ないものも含んでいることを再度お断りするが、授業に欠席することが、ライティングとスピーキングを合わせた英語運用能力を欠かせる要因になることが推論される。逆に言えば、「授業に休まず参加することは、総合的で安定した英語運用能力を高める」と考えられる。

さらにもう1点、前期授業を進行させるうち、英語運用能力に関係しているとい見出した事柄がある。学期当初、予期していなかったが、学期を進めるに従って明瞭となり、前期を終了するに至って確信した事柄である。それは、手書き文字の読みやすさ、である。毎回の小テストをとおして、各受講生の手書き英語の、文字の形・大きさ・濃さ、書き方のくせ、どのような筆記具を用いるかは、宇田におなじみのものとなっている。前期筆記試験においては、それらおなじみの書き方が、小テストに比べればはるかに長い文章で繰り返されていた。しかし筆記試験では、パラグラフに区分けして、教育学部指定答案用紙上に整理した状況で筆記してある

か、ということも観察できた。そして見出した事柄は、「読みやすく整った文書を手書きする学生は、英語運用能力が高い」ということであった。

ここで言う読みやすさは、あくまで読みやすさである。文字が大きく濃く書かれ、字形が細部まで丁寧に書き込まれ、文字や単語の形が整えてあってその上で、単語間間隔や行間が調整されて文書全体の体裁がまとめられている、というものである。書き方に個性があっても構わないが、読み手が読むに楽な手書き、である。極めて読みやすい美しい手書きを仕上げるのは、受講者番号4、5、6、11の学生であった。丁寧さを欠いたぞんざいな書き方をするのは、8、9、10の学生であった。そして、手書きの読みやすい4、5、6、11番の学生はすべて、100点プラス流暢さ優の組み合わせを持ち欠席が少ない。そして備考欄に記したが、これら4名のうち2名は、アメリカにある埼玉大学との協定校へ交換留学することとなった。それに対し、手書きの読みやすさを欠く3名のうち2名は、顕著に筆記試験得点が低く、流暢さを欠き、欠席が多い。

手書きは、学習において重要な役割を果たすツールなのである。手書きが読みやすいことは、書かれた情報が読み手になめらかに伝達され、容易に理解されることを意味する。手書きにおいて書き手は、書きながら読むので、常に同時に読み手となる。従って、読みやすい手書きを書く書き手は、容易に情報を理解しつつ学習を進めることとなり、学習効果が高まるのである。手書きの入念さは、学習態度の入念さを反映するものであろう。文字の濃さは、学習に対する力の入れ方の大きさを反映しているだろう。

さて、前期予備調査期を終えた時点の状況をまとめると、テキストと授業の進め方に関し受講者から不満は聞かれなかった。受講者の受講態度は良好で、4ステップを踏んだ学習を続けたと推察された。英語力を高めるためには、欠席しないこと、手書き文書の読みやすさに意を

表2 後期状況表

| 受講生番号 | 小テスト平均点 | 第1回スピーチ | 第2回スピーチ | 第3回スピーチ |
|-------|---------|---------|---------|---------|
| 1     | 10      | 欠席      | 欠席      | 欠席      |
| 2     | 9.6     | 40、優    | 60、良    | 120、優   |
| 3     | 9.9     | 60、良    | 35、優    | 135、優   |
| 4     | 10      | 90、良    | 60、優    | 180、優   |
| 5     | 9.7     | 90、優    | 45、優    | 150、優   |
| 6     | 9.8     | 45、良    | 55、優    | 180、良   |
| 7     | 9.3     | 30、良    | 30、良    | 60、良    |
| 8     | 10      | 30、可    | 45、可    | 120、可   |
| 9     | 10      | 180、良   | 25、良    | 300、可   |
| 10    | 7       | 欠席      | 欠席      | 欠席      |

| 受講生番号 | 書写評価とそれら回数  | 総提出数 | 筆記得点、単語数・正確さ | 欠席数 |
|-------|-------------|------|--------------|-----|
| 1     |             | 0    | 欠席           | 13  |
| 2     | A 6、B 2     | 8    | 90、100・優     | 0   |
| 3     | A 5、B 3     | 8    | 95、150・優     | 0   |
| 4     | A 5、B 3     | 8    | 90、100・優     | 2   |
| 5     | A 3、B 3、C 1 | 6    | 95、150・優     | 0   |
| 6     | D 2         | 2    | 80、70・優      | 3   |
| 7     | A 2、B 1、C 2 | 5    | 85、200・良     | 3   |
| 8     | B 4         | 4    | 80、80・良      | 4   |
| 9     |             | 0    | 90、100・優     | 1   |
| 10    | A 1、B 1、C 3 | 5    | 欠席           | 10  |

払うことが必要である、となろう。

## II-2-(1) 後期実測期調査方法

前期状況をもとに、後期に新たに取り入れた事柄は4点ある。1点目：書くことの意義を測るため、英語書写を導入した。前回授業で学習したテキスト・スクリプトを、できるだけ読みやすくなるよう配慮した手書きを提出するよう求めた。書き方・書き間違い等を添削し、英文書式に関する指導を加え、A～Dで評価して返却した。2点目：E c sの講師を大学へ派遣してもらい、E c sでのレッスンを受講生に疑似体験してもらった。3点目：英語の発話力を測定するため3回のスピーチ・テストを実施した。1回目、2回目のスピーチ・テストは、E c s派遣講師レッスンの翌週、講師レッスンを受け

て感じた事柄を好きな長さだけ話してもらい、発話時間を5秒単位で測定し、流暢さを優～不可で判定した。3回目のスピーチ・テストは後期試験の一環として、「英語圏文化論演習B」を履修して感じた事柄を好きな長さだけ話してもらい、前2回と同様に測定し評価した。4点目：授業参加レポートを、受講生10名、E c sより派遣されたネイティブ講師2名、および講師派遣レッスンの際には授業参観し、研究打ち合わせのため折に付けて来学してくれたE s c代表取り締まり役より書いてもらい、授業に関する3方面からの意見を収集した。

なお後期筆記試験は、15分間で「アメリカ社会を自由に論ぜよ」という課題で英語論説文を書いてもらい、内容の適正さ、文章の長さ（単

語数)、英語の正確さ(優~不可)の観点から100点満点で評点した。毎回の授業進行方法は、前期と同様である。

## Ⅱ-2-(2) 後期結果

後期数値的結果として、小テスト平均点、筆記試験得点と単語数と正確さ、第1回~第3回のスピーチ・テストの発話時間と流暢さ、書写評価と評価回数、書写総提出回数、欠席回数のデータを得た。受講生には1~10の番号を降ったが、9番と10番の学生は後期から加わった学生である。前期状況表の予備欄に記したが、留学のため後期は受講しない学生が出た。後期は新たに受講生番号を降ったので、同一番号でも前期と後期では学生は異なる。

備考として記すが、3番と8番の学生はアメリカへ、5番の学生はスウェーデンへ、2008年度9月より交換留学することとなった。

## Ⅱ-2-(3) 後期結果に対する考察

小テストは前期同様、全員がほぼ毎回満点である。ただし受講生番号1の学生は、後期授業の初回に出席し、その後1回だけ出席して小テスト満点を取り、後はすべて欠席してしまったので、1番の学生の小テスト平均10点は、考察の対象外とするべきである。後期から履修を始めた10番の学生は、明かに得点が低い。この学生もまた、後期5回出席の後、あとはすべて欠席となった。

筆記試験90点以上の学生は5名いる。これらの学生は前期同様、欠席回数が少ない。それに対し、わずかな得点差なのであるが、90点未満の学生は、欠席回数が多い。授業に来ることは学ぶ熱意を持っていることである。そして一旦授業に参加すれば、指導者や他の学習者から教えと刺激を受け、熱意と学習が深まることとなる。授業参加が英語能力向上に大きな影響を持つことは、当然のことなのである。それだけに、来たくなる授業、楽しく有意義だったと感ずる授業、家で復習と予習がしたくなる授業、そのような授業を創出できる、優れた指導者が望まれる。

筆記試験とスクリプト書写の関係はどうか。90点以上の学生5名のうち4名が、提出回数が多くしかも美しい書写を提出している。得点が低い受講生は、提出回数が少なく読みやすさの評価も低い。手書きで英文テキストを入念に書写することは、英語のライティング能力を高めると言えよう。書写は有益である。ただし、テキストには、誤植もあり、内容や英語の誤りが含まれている場合もあるので、書写課題には訂正や注意を付すことが必要である。

スピーチ・テストの考察に移る。1回目にくらべて2回目において発話秒数が減少している学生が多かったのは、意外であるが、同一テーマで2回目となり、気を抜いてしまったためかと思われる。しかし2回目においては、多くの学生の流暢さが増している。わずかなりとも慣れを得たのであろう。3回目は、テーマ的に半年間の学習全体にかかわり、そして定期テストの一環ということもあり、すべての学生が最も長く話した。スピーチの場数を踏み、発話を持続させる力が付いたとも考えられる。ただし、3回目においては長さのためとテーマの重さのためであろうか、流暢さの伸びは強くなかった。

スピーチと書写の関係を考察すると、3回の発話時間合計が200秒以上であるのは3番、4番、5番、6番、9番の5名である。流暢さ優を2回以上得ているのは、2番、3番、4番、5番、6番の5名である。時間と流暢さの重なりを見ると、3番、4番、5番、6番の受講生は、正確な英語でなめらかに長くスピーチをしたことになる。これらの4人のうち、3、4、5番の学生はスクリプトが美しく、回数が多い。6番の学生に関しては、当該学生の興味が強く会話に傾いており、スクリプト転記などに時間を割きたくない意向であることを、宇田は知っている。2番の学生を検討してみると、スピーチ時間は短い正確でなめらかで、スクリプトが美しく、提出回数が多い。2、3、4、5番の受講生と他の受講生を比べると、英文書写は、なめらかで正確な英語のスピーキング能力を高め

ると言えよう。筆記試験の結果と合わせると「英語書写はライティングにもスピーキングにも寄与する」のである。

#### II-2- (4) 授業参加レポートを通して

8名の受講生から得られたレポート上の意見は、以下の4点に集約できる。1. テキストが現在のアメリカを映し出すものだったので、生身のアメリカを知るに役立った。2. クラスが少人数であったので濃密な指導と演習、そして親しいクラス環境を得ることができた。3. ネイティブの派遣講師によるレッスンは、大学の教員が行う授業一般に比べると、実にフレンドリーで親切な態度で行われ、英語を話すことを容易にしてくれる雰囲気であった。英語を話す機会は日本ではまだ少ないので、会話練習の良い機会であった。4. しかし、派遣講師レッスンでは、日常的话题、講師や学生の体験に関する話が多くなり、テキスト内容を深めようとする思索的な姿勢が欠けることに物足りなさを感じた。

2名の派遣講師レポート上の意見は以下の3点になろう。1. クラス・サイズが小さいので、各学生から多くの発言を引き出すことが楽であった。2. 受講生すべてが、テキストを勤勉に学習して良く理解しており、レッスン時は会話をはずませることに力を注ぐことができた。4. 授業に遅刻してくる学生がいたことは、クラス進行の妨げとなった。

Ecs代表取り締まり役のレポートには、終結部に2つの意見が提示してある。この2つの意見は、レポートの要点であり、かつ英語力向上のための真理を突いている。1. 学生時代は学習時間確保が容易であるから、内容理解→音声インプット→音声アウトプット→講師と共に演習という4ステップで学習し、より容易により大きな英語力向上を期待することができる。2. 国際化社会における英語の必要性を日本人全体が認識することが、日本人の英語力向上に不可欠である。

3方面からのレポートを集成すると、後期授業で得られた数値データの間隙を埋めるアナロ

グデータが浮かび上がる。総計11名のレポートは、英語力向上に有効なものは、興味を抱かせるテキスト、親しい人間関係、段階を踏んだ学習、学習を可能にしてくれる時間、学習を意欲づける環境とし、そして産業界と教育界が合同することにより得られる多面性を高く評価している。

### III 結論

#### III-1 産学共同の有意義性

Ecsで用いられている教材は埼玉大学生に好評に受け止められ、4ステップ学習法は、埼玉大学生にとっては当然のこととして、既に実行されていた。埼玉大学生は派遣講師レッスンを通し英語実践の場を得て、宇田が行う授業とは異なった、英語やテキストに対するアプローチを体験した。派遣講師の側からすれば、大学におけるレッスン経験は、英会話講師としての幅を広げるものであったろう。学生から出された不満(内容に対する深化の不足)は、大学と英会話スクールが置く重点が異なることに由来する。しかし重点が異なる機関が共同すれば、双方がそれぞれの重点、すなわち強み、で補完し合うことができる。宇田個人にとっては、派遣講師の不满(遅刻する学生)は、大きく反省すべき点と考えられた。宇田は遅刻には厳しいつもりでいた。授業は正確な時計に合わせ「5、4、3、2、1」のカウント・ダウンでスタートさせており、担当する全クラスで、遅刻する学生はまれである。しかし英会話スクールにおいては、大学よりもはるかに、講師もラーナーも時間厳守なのであろう。派遣講師2名とも遅刻学生に言及していたことは、宇田にとっては貴重な反省事項提供であり、これも共同研究のたまものと考えられた。

#### III-2 英語運用能力向上のために

1年間の共同研究をとおり、以下の6点を提言する。1. 学習者のニーズに合致したテキストを用いる。2. 4ステップを踏んだ学習をす

る。3. 文字面を大切にす。読みやすい書面を心がけ、頻繁に書くように努める。視覚を通して英語表現とテキスト内容が学習者の体内に定着され、書く力のみならず話す力も増大する。4. 授業やレッスンに欠席しない。5. 欠席しないためには、学習意欲が大切である。指導者は意欲を高める努力をするとともに、出席して実り多かったと感じさせる授業やレッスンを構築する努力をすることが必要である。6. しかし究極は、社会環境である。生活のために英語

が不可欠な社会なら、住民は必然的に英語を身につける。意図的に英語を学習する必要がある社会なら、学習時間が確保できる時間的ゆとりのある社会が大切である。が、真の究極は、親しい人間関係を作り維持することができる、心のゆとりのある社会が、コミュニケーションのための英語を伸ばす要である。

(2008年3月26日提出)

(2008年4月25日受理)



# How to Improve English Proficiency: Proposals Based on a Joint Research

Kazuko UDA

Keywords : English proficiency, joint research, 4-step learning, English script writing

During the academic year 2007, Uda and an English conversation school jointly carried out a research about how to improve English proficiency of Japanese learners. Uda introduced into one of her classes, the textbook, method and instructors of the English conversation school. Uda accumulated classroom data and gathered opinions about the class through two semesters. Based on the data, opinions and Uda's observations on the students, Uda came to a conclusion as below. The conclusion also serves as proposals to improve English proficiency of Japanese learners.

- (1) Textbook should meet the students' needs.
- (2) 4-step learning method is effective.
- (3) Class attendance greatly helps development.
- (4) Students should be motivated by efficient teachers.
- (5) To handwrite English improves English skills overall.
- (6) Social environment is a crucial key for learning English.

In this joint research, Saitama University and the English conversation school worked tightly together: each offered its resources to the other; each supplemented the other with its merits; and each learned from the other. Both parties agreed that the meaning of cooperation was big.